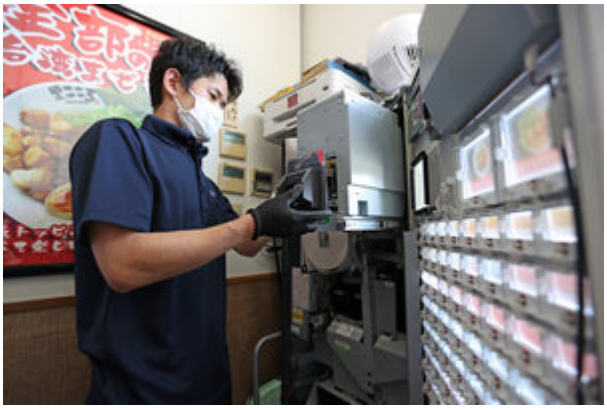
朝日新聞
DIGITAL

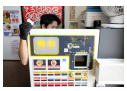
新紙幣対応、急ピッチで作業も「間に合わない」 7月3日登場

有料記事

川村さくら　田中恭太　2024年6月25日 12時00分



「麺屋こころ鶴見店」で券売機の部品を交換し、新紙幣対応に更新するエルコムの社員=2024年6月19日午前9時31分、横浜市鶴見区、友永翔大撮影



新しい紙幣が来週、7月3日から発行される。券売機などを新紙幣に対応させる作業が急ピッチで進むが、間に合わないところもある。費用もかかり、物価高や人件費の上昇にあえぐ事業者からは、恨み節も聞こえてくる。

部品交換で「最大20万円」

「物価高に光熱費高騰に人件費。そこに新紙幣に対応する費用も加わり、四重苦です」。大阪市北区のラーメン店「ストライク軒」の芦田雅俊代表（48）は嘆く。

8年間同じ券売機を使っている。新紙幣に対応するため、紙幣の挿入部分の交換を券売機のメーカーに相談すると、「最大20万円かかる」と言われた。券売機ごと買い替えると約150万円といい、負担の大きさに驚いた。

対応「9月になるかも」

紙幣の挿入部だけ改修する予定だが、経営は苦しい。麺やスープに使う魚介などが物価高で値上がりし、電気代も上昇。人手不足の時代で時給も落とせない。新紙幣対応も踏まえて、1杯900円の中華そばを6月には50円値上げせざるを得なかった。

メーカーからは、対応すべき取引先が多く「交換は9月になるかもしれない」と言われている。それまでは店頭で紙幣を交換するしかないと考えている。「国が決めた新紙幣導入で、ここまで大きな負担があることに理不尽さを感じる」（川村さくら）

新紙幣が使えないケースも

対応が間に合わず、7月3日時点で新紙幣が使えない機械も街中に残る見通しだ。

飲食店や遊園地、公共施設などに券売機の販売やリースをしているエルコム（東京都大田区）では、7月3日を前に、従業員が「フル稼働」で更新に追われている。

専務の川浪武盛さんによると、新紙幣に対応するには、15万～40万円で部品の交換や内部ソフトの更新をするか、70万～200万円超で新しい券売機に買い替える必要がある。

同社が扱う券売機の場合、メーカーが昨年夏ごろから新紙幣対応の機械や部品を出し始めていた。だが更新や買い替えの依頼が増えたのは、今年に入ってから。現在も対応が追いついていない。

駆け込みが発生

6月中旬時点で、顧客から受けている依頼のうち、対応できているのはソフト更新などが3分の2ほど、入れ替えは半分ほど。7月3日に間に合わない依頼も出る見通しだ。現在はソフト更新などの依頼に対応できるのは「8月ぐらい」、買い替え依頼には納期が回答できないと答えているという。

バス券売機は6～7割

同社では2004年11月に現行紙幣が発行された際は、発行後も半年ほど部品交換の対応が続いた。その経験から今回は顧客に早めの対応を促していたが、やはり駆け込み需要が発生した形だという。

川浪さんは「特に飲食店などはコロナ禍で経営の先行きが不透明だった。高額の負担は先送りして、発行ぎりぎりまで待とうと考えたのかもしれない」と話す。

業界団体の日本自動販売システム機械工業会（東京）が6月上旬にメーカーに聞き取った調査によると、金融機関のATMは9割以上、鉄道の券売機は8～9割、バスの券売機は6～7割が、6月末には新紙幣に対応できる予定という。

一方、飲食店などの食券機や、病院などの自動精算機、両替機の対応割合は5割にとどまる見通しだ。全国に約222万台あるとされる飲料自販機では2～3割だという。担当者は「新紙幣への対応は飲料会社などの判断になるが、発行量が増えるにつれて対応していく意向を持つ会社があると聞いている」と話す。（ 田中恭太 ）

偽造防止技術を導入

新紙幣の1万円札には実業家の渋沢栄一、5千円札には津田塾大学を創設した津田梅子、1千円札には破傷風の予防・治療法を開発した北里柴三郎の肖像が描かれる。デザインの一新は2004年以来20年ぶり。日本銀行は、来年3月末までに74億8千万枚の新札を刷る計画だ。偽造防止のため、世界で初めて「3Dホログラム」が採用され、どの角度からも3Dで表現された肖像を見られる。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.